

発表題目 行動と表象——ドレッスキ行動論の再検討

勝亦 佑磨 (Katsumata Yuma)

東京大学大学院総合文化研究科 科学史・科学哲学研究室 所属

本発表の目的は、ドレッスキが『行動を説明する』(Dretske, 1988) において提示した行動論を再検討し、その可能性と限界を示すことである。特に、そのなかでもドレッスキの提示する「表象」理論と「行動」との関係に焦点を当て、これが「誤表象問題」を解決しているかどうかについて検討したい。本発表の構成は、次の通りである。

第一に、「因果 - 情報説」と呼ばれる、ドレッスキの初期の表象理論 (Dretske, 1981) をみて、その問題点を示す。因果 - 情報説とは、「A が B を表象する」とき、B が A を因果的に引き起こし、その過程において B についての情報が A に伝達されるというようなものである。ここで重要なのは、A と B の関係は厳密な法則によるものであるという点である。しかしながら、こうしたドレッスキ初期の表象理論は、「選言問題」に陥ってしまい、「誤表象」をうまく説明できないものとして問題があると批判されてきた。(例えば Millikan, 1989)

第二に、ドレッスキ行動論の概要を示し、そのなかで修正された表象理論をみて、ドレッスキが誤表象問題をいかにして解決しようとしたのかを示す。ドレッスキは、行動を生物学的な内的状態 C (例えば脳状態) が身体運動 M を引き起こす過程であると考えている。内的状態 C は、それが外部のある状態 F を表示しているゆえに、身体運動 M の原因として採用される。ここで内的状態 C が F を表示することができるのは、生物が過去に「学習」を通じて、「F を表示する機能」を得たからである。ここで重要なのは、ドレッスキが誤ることのない「表示」と誤りうる「表象」という語を区別している点である。つまり、ドレッスキによれば、「誤表象」は存在するが「誤表示」は存在しない。そして、内的状態 C が「本来表示すべきもの」を正しく表示しないとき、誤表象が生じる。ドレッスキはこのように表示と表象を区別することで、誤表象の可能性を残そうとしたのである。

第三に、ドレッスキ行動論で提出された表象理論に関して検討している論者の主張をみる。例えばドレッスキは誤表象を「本来表示すべきもの」を用いて説明するが、説明すべきなのは「本来表象すべきもの」であり、それが説明できない以上、結局のところ「選言問題」を回避できず、誤表象を説明できていないという批判がある。(水本, 2006) また、ドレッスキ行動論の中核をなす「学習」の理論は、今までに経験したことのないような純粋な欲求を説明できないなど、そもそも問題があるのではないかという批判もある。(Bratman, 1990) 以上のような議論を通して、ドレッスキの修正した理論が、誤表象問題をどこまで解決したかと同時に、その未解決な問題に関して、発表者なりの見解を示したいと思う。